福崎町文化に貢献した人
～木村真康氏について～

松田八束

はじめに

現在、福崎駅前の風景は再開発ですっかり様変わりしている。日に日に変わる姿を見て、期待におおきく胸を膨らませる方もあれば、昔の風景を何らかの形で残して欲しいという気持ちを胸の奥に仕舞い込んでおられる方もあるのではないか。そこで駅前の思い出を綴り、此処に投稿する。

福崎町文化に貢献した多くの人々について、福崎町文化第三十四号に掲載された内山嗣隆氏の「歌人の足あと」の中に、駅前で長年活躍された方がおられる。

そこに触れられている木村真康氏に焦点をあて、筆者が特に心動かされたことについて述べていきたい。

写真一　前列左から　桧本兼夫　阪口保
後列左から二人目　岸原広明　木村真康

図一　真康氏周辺の師弟関係

真康氏の略歴

彼は、明治三十九年、市川町上瀬加で生まれた。小学校卒業後、文学を志し、大阪・京都・東京等各地を放浪遊学した。大正十一年、阪神住吉で運送店員をしていたとき始めて東京の少年雑誌に短歌を投稿して、特選となりました。十六歳のときだ。昭和二年、二十一才、帰郷して瀬加村営バス会社に就職し、盛んに短歌修行をした。桧本兼夫、椋野秀樹等と、文芸誌「若人」「龍騰（りんどう）」等発行〔写真二〕。昭和三年、林猛先生を知り、短歌にのめりこんでいった。昭和五年、白日社入社、歌人前田夕暮、阪口保両先生に師事〔写真二〕〔図一〕。

写真二　左から　西部治夫　岸原広明
前田夕暮　木村真康　阪口保

終戦の年、昭和二十年十二月には、若人達の夢と希望を育めるようにと、「文学圏社」を創立。機関誌「文学圏」は現在も発行され七百五十六号（平成三十一年三月）に達する。市川町・福崎町の方もかつてはたくさん同人として、参加されていたが残念ながら現在は少なくなった。福崎駅前の木村真康氏の経営するタクシー会社の営業所が文学圏社〔図二〕の活動拠点だったが、晩年には、市川町の石妙寺に移った（現在の活動拠点は神戸市）。

追憶

福崎駅前には播但線の中核駅に相応しく、沢山の自転車預かり店、銀行、百貨店そしていくつかの商店が在った。福崎駅の正面玄関の真向かいに、真康氏の経営するタクシー会社の営業所があり、間口二間程の小さな建物で古ぼけた板壁の色が田舎の風景によく溶け込んでいた。向って左の入口から入って、右の部屋は土間で、正面に駅の玄関が見えた。ある日、私は始めてその営業所へ、父に連れられて行った。ひとりで駅の玄関が見える部屋に入ってみると、質素な木机と椅子が置かれていた。そこには、二人の若いおじさんがい

て、一方のおじさんが小学生の私に「ぼく、この机は君のお父さんのものだよ！此処で一番歌（短歌）が上手い人だよ。すごいだろう！」と言って、私の反応を見ているようだった。私はその時、少し可愛げがなかったが、黙っていた。この小さな空間は文学好きの青年が集う大切な場所なのだなと感じた。

父松田道別（どうべつ）の出征後に生まれた私が始めて父を知ったのは、三才になって暫くたった真冬だった。来客があり夕方になっても家に居るので不思議に思い母に尋ねたところ、よそのおじさんだと思っていた人が自分の父であると知り衝撃をうけた。母も私が尋ねる迄に、何の説明もしなかった。私の父道別は、敗戦の色濃くなった昭和十七年出征した。衛生兵として満州、台湾、フィリピンと転戦し、終戦の翌昭和二十一年一月、失意に打ちひしがれて復員した。そして短歌好きであった父は真康氏と親交を深めるようになり、真康氏を中心に仲間が集まって、文学圏の短歌会を定期的に開いているようだった。それ以降、折に触れて、矢谷水青、岸原広明、木村真康、父道別（どうべつ）達の作品を文学圏紙上で見る機会があり、さらに身近に感じることができた。

福崎町文化への貢献
―真康氏の決意の原点―

あるとき、真康氏から直接こんな話を聞いたことがある。

―自分が若い頃、東京のタクシー会社につとめていたとき、ある日、書生風の青年が入社してきた。どこか人を惹きつけるところがあるなと思った。いつだったか、客が全く来ない日があった。一日中会社にいても仕方ないので、帰宅する人がある中、自分もそろそろ帰ろうかと思っていると、『わたしひとりで、留守番するから帰ってくれていいよ！』とその人は言った。若いのに遊びにも行かないで、独り留守番役を買って出て、机に向って難しい本を読んでいる。頼もしい人がタクシー屋にも居るものだと感心した。この書生が、後に民社党を創った西尾末広だった。―

真康氏は、この書生に感化され、放浪遊学にピリオドを打った。郷里に帰って播磨の青年達に夢と希望を与えるようなことをしようと決めた。ここに、真康氏の行動の原点があると思われる。

貢献（その一）文学圏社の設立

真康氏（年齢から兵役は無かった）は、先に触れたが、昭和二十年十二月、文学圏社創立、翌年四月「文学圏」創刊号を発行した。当時の気持ちを、後の昭和五十六年一月文学圏三百号の記念誌に、「今日を記録する」と題して、次のように書いている。―終戦直後の社会情勢は実に暗澹たるものがあった。敗戦の衝撃は農村の青少年の純な心を蝕んで彼らは退廃的な気分の中で毎日堕落に結びついていっていた。こんな状況の中で私と岸原広明、西部治夫の三人は、郷土色豊かな文芸雑誌を作って、青少年らの情操教育の場をもとうとした。―（図二）。

昭和四十二年［詩歌］復刊号に参加し、同人となる。前田夕暮の没後十六年後のことであった。

図二　昭和五十六年頃の
文學圏社幹部構成

貢献（その二）
―柳田國男生家移築―

柳田國男生家は元来、辻川の、銀の馬車道街道筋に面してあった。変遷があり、後に、移築か取壊しかの議論が起こった。取壊しが決まりかかったとき、真康氏は立ちあがった。「福崎駅に降り立つ人のうち、全国からの殆どの人は、柳田國男生家を訪ねてくるのだよ！そんなことしたら、福崎町は全国の物笑いの種になってしまう。」と言った。すると、「移築するには、百万円かかるのですよ！その金は誰が出すのですか？」という声もあった。真康氏はその言葉に「その金は自分が出す。私が寄付を集めてみせる！」と声を荒げた。そのあと、商工会に協力を呼び掛けた。その折、伊藤青年（後出する伊藤源五氏）が、賛成してくれて、大いに勇気づけられたと、人に語っている。元兵庫県知事阪本勝の力も大きく働いて、昭和四十九年、この移築事業が成功した。この時より三十年も前に折口信夫が柳田生家の当時の所有者に文化財としての保存の大切さを訴えていた。

今日の辻川地区隆昌の基を築いた先人の努力を無にしなかっ真康氏の人柄のおかげではないかと考える。

貢献（その三）
―「山桃忌」の創設―

柳田國男とその兄の井上通泰の祥月にあたる八月に、二人の偉業を偲んで「山桃忌」が開催されている。「山桃忌」の名前はふるさとを詠んだ二人の歌に、幼い頃に遊んだ山桃の木が出てくることに由来する。

「柳田先生兄弟の偉大なことは申すまでもないことである。こんな偉大な人達を出した福崎町は、もっと郷土を誇っていい筈である。」と常々思っていた真康氏は、柳田國男生家の移築の件で、多くの協力者を知り、福崎町が郷土の誇りを持てるとして、喜んだ。山桃忌は地元で活躍する伊藤源五氏が提案し、木村真康氏は短歌の道で築いた人脈を活用され、心ある有志達が協力して開催されるようになった。

昭和五十五年八月十日柳田國男兄弟追悼会として木村真康氏、矢谷水青氏が出席した。これが第一回の山桃忌である。

山桃忌奉賛短歌祭は、それを提案された大善寺の棟廣照文氏と共に、高齢になられた真康氏と文学圏及び福崎短歌会の熱意によって、昭和六十一年十月十二日に第一回がおこなわれた。第二回以降は、山桃忌に合わせて行われている。初期からの山桃忌は柳田國男生家で行われていたが、第二十六回以降、文化センター、そしてエルデホールに場所を移して行われるようになり、多くの人達の参加が得られている。

観音寺境内に、通泰の歌碑を建てたのは、真康氏が中心に熱心に働きかけたからだ。

「うぶすなの杜のやまももふる里は
はかなきことも恋しかりけり
通泰」

貢献（その四）
―「福崎音頭」の作詞―

福崎音頭の歌詞は、みんなが育ったふるさとの香りを、いっぱいつけている。歌詞そのものを此処に書く紙面が無いので省く。一番から五番までの全ての出だしは「はりま福崎」で始まり、一番は先ず「みどりの町よ」と歌い、県下八景の一つ、七種四十八滝が描かれ、山深い渓で修行した聖達と山岳信仰を想起させる。

二番は、「ロマンの町よ」と続き、春日城山と鍛冶屋部落のかくしほちょじの今に伝える祭りの中に八千種地区のみなさんの情熱が写されており、それが未来へ繋がって欲しいと、願っているようだ。

三番は、「文化の町よ」と言い、田原の文殊さんと柳田國男生家や、町づくりの鍵である民俗学が、それそこにあると教えている。

四番は、「お米の町よ」と振り返り、美しい山川から集まる水、清浄な空気、太陽で育まれるお米が、七種川・市川流域の田園地帯に秋毎に稲穂が黄金色に波打ち続けて欲しい、それが変わらぬ願いだと唄っている。

五番は、「かなめの町よ」と結んでいる。交通の要衝インターチェンジを示し、古くから東西南北の往来を結ぶ位置にあることをうたっている。福崎音頭は、昭和五十一年八月九日付で制定された。

歌は五番でおわる。真康氏は、第六番目の歌詞を、吾々に、宿題として残して置いていたと解釈したい。

このように思う根拠が真康氏の随筆（「文学圏」昭四二・八）に、「ふるさとの味」と題した一節にある。

―こうした田舎には、田舎特有の楽しい空気が満ちていた。郷土色豊かな情緒と、素朴で純真な人情が漲っていた。こんな中に育った子供達には、楽しい思い出と、なつかしい自分だけの胸に生きた土地があった。山川草木みな幼い自分が生きていた。遠い祖先が歩いて来た足跡があった。みなこの時代の田舎に育った者の身についた、ふるさとの匂いであった。―

おわりに―ふるさと愛のこれから―

真康氏を知れば知る程に、郷土愛にあふれた人だと誰もが思うだろう。IT・AIの発達する時代に順応することと共に変わらぬ故郷への愛が大切だ。

駅前の小さな営業所の、質素な机と椅子があった部屋こそ、文学圏社誕生の場であり、真康氏の貢献を生み出した場であったことを忘れないでほしい。

「雪白く置きたるままに春たちし
はりま高嶺に光る陽のいろ
真康」

写真三　昭和45年、真康氏64歳の時に、功を記念して、文学圏社が石妙寺境内に彼の歌碑を建てました。